「産業観光まちづくり大賞」概要と評価点

日本観光振興協会はこのほど、第7回「産業観光まちづくり大賞」の受賞5団体を決めた。各団体の概要と評価のポイントを掲載する。今後の産業観光まちづくりの参考にしてほしい。

金賞

おおたオープンファクトリー実行委員会（東京都大田区＝大田観光協会・工和会協同組合・首都大学東京・横浜国立大学・東京大学）

【概要】

現在4千件ほどの工場が立地する東京都大田区のモノづくりは、切削、プレス、研磨などの機械金属加工に係わる技術（基盤技術）の集積及びネットワークを強みとして、地域における暮らしとともに密接に結び付いてきた。

大田区では、「おおたクリエイティブタウン研究会」（大田観光協会＋3大学）を組織し、大田のモノづくり、あるいはモノづくりのまち再生、活性化に対して、①新たな創造産業の育成②モノづくりの裾野の拡大③魅力ある創造空間の再生という3つの戦略から構成される「大田クリエイティブタウン構想」を掲げてきた。

そして、これらの目標を実現するための一つの手段として「観光」の力に注目してきた。

しかし、大田のモノづくりを観光コンテンツとして提供するには難しい面もある。稼働中の中小工場にとっては、人的、空間的（施設的）な負担が大きい。また、最終製品を製造している工場は少なく、部品や技術そのものの魅力をどのように伝えたらよいのかという問題もある。

そこで、大田区における「産業観光」は、大田のモノづくり及びモノづくりのまちが抱える問題点の解決、また工場側にとってのメリットをいかに見い出していくか、その2点に留意し、新たな「モノづくり観光」の構築を目指した。

「おおたオープンファクトリー」は、この「モノづくり観光」の中核をなすプロジェクトであり、特定エリアにおいて、期間限定で複数の工場見学と体験プログラム、さらにはそれを巡るまち歩きツアー等によって、モノづくり及びモノづくりのまちを地域内外にアピールするイベントのことである。

おおたオープンファクトリーの主要なコンテンツは、①工場オープン②来訪者をもてなす拠点施設③モノづくりコンテンツ集約イベント―だ。

①工場オープン（含むツアー）

各工場における経営者や職人との触れあい、普段は見ることのできない技術や機械へのアクセスが最大の魅力である。公開される工場の多くは中小工場であり、それぞれのキャパシティーに応じて、工場公開方法を分け現場を産業観光資源として捉え、モノづくり現場の再生や活性化を図るため、産業観光に取り組んだ点が高く評価される。

・また、中小のモノづくり集積地の取り組み事例は他地域でも見られるが、大田区は、優れて体系的な仕組みを構築している。特に、顧客属性ごとにプログラムの差別化を図ることにより、企業側のニーズもうまく取り込んでいる点が高く評価できる。

・観光客の受入窓口や対応、産業観光資源としての魅力を着実にアピールし、イベント継続へのステップも十分に進められていることから、地域連携のモデルケースとなる。

・外国人観光客にとっても、日本のものづくりの原点を見聞することは非常に興味深い分野であることから、羽田空港の国際化に伴い、「おおたオープンファクトリー」を外国人観光客にも提供することでさらなる国際化が期待される。

②拠点施設

来訪者をもてなすために案内、展示、休憩の各機能を持つ臨時の拠点施設を駅の旧売店、町工場とその外部空間（路地裏）、銀行の非営業時間の店先など、低未利用空間を活用して設置している。

③モノづくりコンテンツ集約イベント

町工場の持つ技術や製品を生かした一般消費者に親しみやすい形の製品の展示や販売を行っている。また、子ども向けのクイズラリーや各工場前での案内ボードなど、工場の人・技・製品の魅力を余すところなく伝えられるよう、尽力されている。

おおたオープンファクトリーの開催意義に関しては、参加工場にとっては①近隣対策事業②営業活動③受注契約や製品開発のきっかけ④社員のホスピタリティ向上の場として活用できる点が、地域にとっては①工場集積地である地域イメージや魅力のプロモーション②空きスペースや路地裏などの地域における低未利用空間の発掘の機会③近隣の工場との付き合いのない新住民が工場を知る機会としての活用可能性が浮かび上がった。

また、各工場等での販売や来訪者の消費行動よりもむしろ、工場経営者や従業員との交流に力点を置き、製品（モノ）からでは分かりにくいモノづくりの魅力を、工場やまちのヒトや雰囲気の面から伝えられることができた。

【評価のポイント】

・経営環境の厳しい大田区のモノづくり（生産）のまち「モノづくりのまち」の風景といえば、石エネルギー室蘭製油所」などの各企業が放つ作業灯の輝きである「工場夜景」をはじめとした夜景鑑賞と、「鉄」といった実際の工業産業物を生かした「モノづくり体験」などの取り組みに力を入れている。室蘭の「夜景」は、市民にとって〝当たり前〟の風景だったが、市の広報誌で夜景特集を掲載したところ、改めて夜景の魅力に気づいたという市民の反響が非常に大きかったことから、夜景への手応えを感じ取った。現在では、地元企業と協力し船で洋上から夜景を眺める「ナイトクルージング」や「室蘭夜景見学バス」などが企画され、大変人気を集めている。

「鉄」に関連した取り組みでは、鉄のまち室蘭市輪西町の「ボルタ工房」で作られている、ボルトやナットなどを半田付けした人形「ボルタ」がある。当初は、鉄に親しむイベントとして開催されている「アイアンフェスタ」で体験溶接として作られた人形だったが、これが大変好評となった。鉄をより親しみやすくキャラクター化することで、観光活用への可能性が広がった。

モノづくりのまちならではのイベントや体験教室などは、見るだけでなく実際に触り、体験し、制作するというモノづくりの課程を学べる場となっている。

室蘭市の「工場夜景」は、今や全国的に知られるところとなったが、この地域に根付いている歴史や市民の街に対する思いを多くの人へ伝えていくこともまた、観光推進に案内、展示、休憩の各機能を持つ臨時の拠点施設を駅の旧売店、町工場とその外部空間（路地裏）、銀行の非営業時間の店先など、低未利用空間を活用して設置している。

③モノづくりコンテンツ集約イベント

町工場の持つ技術や製品を生かした一般消費者に親しみやすい形の製品の展示や販売を行っている。また、子ども向けのクイズラリーや各工場前での案内ボードなど、工場の人・技・製品の魅力を余すところなく伝えられるよう、尽力されている。

【評価のポイント】

・室蘭における明治初期からの歴史的な発展経緯を重視し、それらに係わる歴史的産業資源を産業観光の素材としてうまく活用している点が評価される。

・室蘭の中心的な産業であった重厚長大型産業も時代の流れにより大きく変化していくが、「ものづくりのまち」として次世代に引き継いでいくための取り組みが評価される。

・どちらかというとマイナスのイメージを持たれがちな工場を逆転の発想で観光資源としてとらえ、工場夜景ナイトクルージングや工場夜景見学バスの運行などにより多くの観光客が訪れるようになったことが評価される。

・地域資源の特異性・独自性を十分に認識し、しかも地域内の企業や行政と市民、NPOとの連携が良くできている点が評価される。

銀賞

室蘭観光推進連絡協議会（北海道室蘭市＝室蘭市・室蘭商工会議所・室蘭観光協会）

【概要】

室蘭市は明治5年の開港以来、製鉄・製鋼・造船などの工業技術が発展してきた北海道随一の重工業都市「モノづくりのまち」である。明治25年、北海道炭鉱鉄道が岩見沢―室蘭間に開通すると、室蘭港は石炭の積み出し港として繁栄の一途をたどり、さらにその後、明治40年に現在の日本製鋼所室蘭製作所、明治42年に新日鐵住金室蘭製鐵所の前身が設立されると、「鉄」の企業城下町として大変にぎわった。

近代に入ると「産業構造の転換」によって、かつてほどの企業城下町としてのにぎわいは薄れていったものの、現在でも現役の工場が稼働しており、明治モダニズムを象徴する工場の姿を今に伝えている。

平成21年からは観光協会・商工会議所と連携して室蘭観光推進連絡協議会を立ち上げ、モノづくり観光などや近年話題の夜景鑑賞を食や自然景観など様々な観光資源と連携させて滞在時間の増加などを目指している。

室蘭市は、工業港として日本の産業を引っ張ってきたが、1980年代に入ると製鋼・造船業が不況に陥り、産業都市としての活気を失っていった。

そのような中、平成10年（1998年）に開通した東日本最大の吊り橋「白鳥大橋」をきっかけに、室蘭地域を自立・再生させるために「NPO法人室蘭地域再生工場」が立ち上がり、産業観光をテーマにしたフォーラムの開催や新日鐵住金・日本製鋼所などの工場見学、夜景ツアーなどを積極的に行っている。

モノづくりのまち、産業都市としての原点を求めるために、市内にある文化財等も大切に保存されてきた。明治時代頃の産業文化財が点在するのは、産業都市ならではの風景であり、このまちの歩んできた歴史を物語る材料となる。

室蘭地域では、「モノづくりのまち」の風景といえば、石エネルギー室蘭製油所」などの各企業が放つ作業灯の輝きである「工場夜景」をはじめとした夜景鑑賞と、「鉄」といった実際の工業産業物を生かした「モノづくり体験」などの取り組みに力を入れている。室蘭の「夜景」は、市民にとって〝当たり前〟の風景だったが、市の広報誌で夜景特集を掲載したところ、改めて夜景の魅力に気づいたという市民の反響が非常に大きかったことから、夜景への手応えを感じ取った。現在では、地元企業と協力し船で洋上から夜景を眺める「ナイトクルージング」や「室蘭夜景見学バス」などが企画され、大変人気を集めている。

「鉄」に関連した取り組みでは、鉄のまち室蘭市輪西町の「ボルタ工房」で作られている、ボルトやナットなどを半田付けした人形「ボルタ」がある。当初は、鉄に親しむイベントとして開催されている「アイアンフェスタ」で体験溶接として作られた人形だったが、これが大変好評となった。鉄をより親しみやすくキャラクター化することで、観光活用への可能性が広がった。

モノづくりのまちならではのイベントや体験教室などは、見るだけでなく実際に触り、体験し、制作するというモノづくりの課程を学べる場となっている。

室蘭市の「工場夜景」は、今や全国的に知られるところとなったが、この地域に根付いている歴史や市民の街に対する思いを多くの人へ伝えていくこともまた、観光推進に案内、展示、休憩の各機能を持つ臨時の拠点施設を駅の旧売店、町工場とその外部空間（路地裏）、銀行の非営業時間の店先など、低未利用空間を活用して設置している。

③モノづくりコンテンツ集約イベント

町工場の持つ技術や製品を生かした一般消費者に親しみやすい形の製品の展示や販売を行っている。また、子ども向けのクイズラリーや各工場前での案内ボードなど、工場の人・技・製品の魅力を余すところなく伝えられるよう、尽力されている。

【評価のポイント】

・室蘭における明治初期からの歴史的な発展経緯を重視し、それらに係わる歴史的産業資源を産業観光の素材としてうまく活用している点が評価される。

・室蘭の中心的な産業であった重厚長大型産業も時代の流れにより大きく変化していくが、「ものづくりのまち」として次世代に引き継いでいくための取り組みが評価される。

・どちらかというとマイナスのイメージを持たれがちな工場を逆転の発想で観光資源としてとらえ、工場夜景ナイトクルージングや工場夜景見学バスの運行などにより多くの観光客が訪れるようになったことが評価される。

・地域資源の特異性・独自性を十分に認識し、しかも地域内の企業や行政と市民、NPOとの連携が良くできている点が評価される。

特別賞

秋田内陸縦貫鉄道株式会社（秋田県）

【概要】

秋田内陸縦貫鉄道は昭和9年に国鉄阿仁合線、昭和45年に国鉄角館線、昭和61年に第3セクターとして秋田内陸縦貫鉄道株式会社に移行された線区で、昭和61年11月鷹巣―比立内間の旅客営業開始を経て、平成元年4月鷹巣―角館間94・2キロメートル（駅数29駅）の全線営業開始、以来、地域住民の通勤・通学の足として重要な交通手段となっている。一方、阿仁には、鉱山と森林鉄道で栄えた歴史もあり、当時の建築物なども残されている。また、沿線地域の自然や文化、温泉、産業などを鉄道という交通手段を介して、地域の紹介、誘客、交流などの観光施策に積極的に取り組んでいる。

秋田内陸鉄道を活用した事業としては、秋田内陸鉄道沿線の落葉樹や渓谷、秋田杉林を鑑賞するための施策として、超低速運行列車「秋田内陸線時間（とき）のまほろば列車」を四季ごとに運行している。

また、企画列車として

・各駅停車の列車が、駅に停車するごとに地元農家のお母さんの手作り料理が持ち込まれる「ごっつお玉手箱列車（動く農家レストラン）」＝随時企画

・列車の車窓からホタルを観賞する「ホタル号」＝7月頃

・冬の名物となった「サンタ号」＝12月頃

・沿線のお母さん達の手作りつるし雛と沿線の小学生のおひな様の絵や桃の花でデコレーションした「おひな様列車」＝2～3月

などを運行している。

これらの列車には内陸線観光アテンダントが乗車（一部区間、一部列車）し、沿線の見所の紹介や観光案内、地域土産品やグッズなどの販売を行っている。また、沿線の農家や自治体、高校生、JAの方々と一緒になって、阿仁前田駅―阿仁合駅、阿仁マタギ駅及び羽後太田駅―角館駅間で田んぼアートを作成し、6～10月にかけて車窓から鑑賞して楽しんでいただいている。

秋田内陸縦貫鉄道沿線の産業観光資源としては、①旧阿仁鉱山関係＝阿仁鉱山は、小沢鉱山、萱草鉱山、真木沢鉱山、一の又鉱山、二の又鉱山、三枚鉱山の六ケ山の総称で、江戸時代の最盛期には産銅日本一を記録したが、昭和53年に閉山した②マタギ文化と道具・＝阿仁マタギと呼ばれる人々は、根子、比立内、打当の3集落に居住し、根子がマタギの発祥の地と言われる。打当温泉に隣接して「マタギ資料館」や期間限定で「マタギ学校」も開設している③上桧木内の紙風船上げ＝江戸時代に平賀源内が教えたと伝えられており、「どんと焼き」の代わりとして毎年2月10日に「紙風船上げ」の行事として行われている。実物の大の紙風船と資料を展示した「紙風船館」がある④角館武家屋敷＝築200年以上の武家屋敷が建ち並び、藩政時代の面影を今に伝える国指定の重要伝統的建造物保存地区。

沿線自治体や沿線住民による「秋田内陸線に関する地域懇談会」などからの意見を取り入れ、通学する学生による沿線マップや地元で採れた山菜、川魚、農産物を利用した料理の提供、タクシー会社やバス会社との連携などにおいて、さらなる産業観光の深度化を模索している。

【評価のポイント】

・沿線地域の自然や文化、温泉、産業などの地域資源を鉄道という交通手段を介して、観光振興

・観光客誘致に積極的に取り組んでいる点が評価される。

・全国的には厳しい経営環境の地域鉄道だが、地元住民を巻き込んだ企画列車や地域資源を活用した企画列車が次々に生みだされ、しかも継続的に運行し、利用客を確保している点が高く評価される。

・また沿線の農家や自治体、高校生、JA等の方々と一緒になって田んぼアートを設営し、車窓からの風景に魅力付けしている点が評価される。

・地域資源をうまく生かし、アテンダントなどの工夫なども取り入れ、地方鉄道と地域活性化に取り組んでいる姿が高く評価できる。

静岡商工会議所（静岡県）

【概要】

静岡商工会議所では、第1次中期行動計画（2011～13年）の「地域づくり」「観光誘客の支援」において、「静岡市特有の産業観光や体験型ニューツーリズム等、新たな観光メニューづくりの開発・商品化を支援する」を策定し、産業観光を中心とするニューツーリズムの開発、商品化を目指すための作業部会「しずおかニューツーリズム開発WG」を設置した。さらに、静岡商工会議所の広報誌の観光・飲食部会特集にて、「静岡ならではの産業観光」について、静岡市の産業観光について、「産業観光エスコーター」の同行により、参加者の知的好奇心を満足させる内容になっている点が評価される。

・従来の募集型に加え、近年は受注型（参加者の希望をプログラム化）のツアーが増加しているという点が注目される。

・CSRツーリズムというユニークなネーミングで、7年間にわたり着実な成果を挙げてきている点が評価される。

・宇部・美祢・山陽小野田産業観光バスツアーで設定されているコースは、それぞれのテーマに沿ったストーリー性を持たせており、さらに、地域の産業について熟知している「産業観光エスコーター」の同行により、参加者の知的好奇心を満足させる内容になっている点が評価される。

・宇部・美祢・山陽小野田産業観光バスツアーは、平成25年度で7年目となるが、毎年着実に参加者が増え、平成24年度は1668名のお客様が参加している。

本地域は、これまで周辺の他市と比べて知名度のある観光資源がないことから、観光地としての認識はほとんどなかった。しかし、平成18年度より、山口県と協働で「産業観光」の研究を開始し、平成19年5月に「宇部・美祢及び山陽小野田市における産業観光の総合的かつ効果的な推進による『観光』を核とした地域の振興に取り組む共同事業体を創出すること」を設立目的に掲げ広域連携による「宇部・美祢・山陽小野田産業観光推進協議会」が設立された。

推進協議会では、当地域の特性であり一番の観光資源となる「地域らしさ」はCSR（企業の社会的責任）によってまちが形成されてきたことでありと導き出した。社会に貢献する存在としての産業の魅力を産業観光の体験によって伝えることができれば、当地域のブランド価値が高まり、地場産業のPRにもつながる。

働きがいや社会のために尽くす意義・喜びなどがうまく伝われば、旅行者のニーズを捉えることも可能であろうということで「CSRツーリズム」が誕生した。

一番の人気コースである「セメントの道」を例にとってみると、まず、石灰石がどのようにできるかを学び、次に石灰石掘する現場や、セメントの中間製品であるクリンカーを製造する世界最大級のキルン（セメントの原料を焼く窯）のあるセメント工場を見学する。その後、全長約30キロメートルの日本一長い私道、宇部興産専用道路をバスで走行する。

また、この道路の途中にはトレーラー整備場があり、クリンカーや石灰などを輸送している全長30メートル、80トン積みのダブルストレーラーを見学し、最後に宇部興産の本社にあるUBE―i―Plazaで最終的な製品や宇部興産の歴史を学んでツアーが終了する。

この他のコースについても、各テーマに沿ってストーリー性を持たせており、参加者の知的好奇心を満たしているツアーということで、宇部・美祢・山陽小野田産業観光バスツアーを「大人の社会派ツアー」と銘打って実施している。

また、このツアーの特徴であり、セールスポイントとなっているのが実際に訪問する企業のOBの方や業界の関係者、郷土の歴史を研究する郷土史家の方にお願いしている「産業観光エスコーター」である。実体験に基づいた〝ここでしか聞けない話〟や、彼らが企業や地域に足を運んで集めた口コミの話が人気となっている。

今後の課題としては、事業経費の削減等を含む運営体制の維持・充実や産業観光エスコーターの確保・充実、新たなツアーコースの開発を含めたコースの見直しの検討である。また、この事業により、地域外、県外から増加している点が評価される。

・宇部・美祢・山陽小野田産業観光バスツアーは、近年は受注型（参加者の希望をプログラム化）のツアーが増加しているという点が注目される。

・CSRツーリズムというユニークなネーミングで、7年間にわたり着実な成果を挙げてき